

# 鈴木雅次名誉会員の文化勲章受賞をよろこぶ

土木学会会長 工博 石原藤次郎

11月3日、菊花薫るこの文化の日に、われわれのもとも敬服する大先輩の一人、鈴木雅次先生に対し、皇居において文化勲章の伝達式が行なわれ、翌4日には教育会館において、文化功労者の顕彰式が行なわれた。土木界における最初のことであって、感慨一入のものがある。先生の栄誉に対して、土木学会会員一同あげて心から祝意を表するとともに、文化の基盤をつくるものとして、土木工学の分野が認められたことを喜びたいと思う。

先生のお言葉によれば、土木工学の専門分野はどんどん深く掘りさげていけばよいが、その目的をはっきり理解していなければならない。それもただ技術的な目的ではない。その技術が人間の福祉をもたらすものだということがわかっていなければならないといわれる。ともすれば、企業利益のかげになりがちな土木技術ではあるが、その本来の任務が人類への奉仕であるとして、先生は立派に学問体系をつくってこられたのである。こうした立場、心がまえこそは、土木界の将来の魅力ある発展を約束し、輝かしいビジョンをつくり上げていくであろう。

先生が大正3年九州大学土木工学科を卒業後、内務省に入社、昭和20年技監を退官されるまでの活躍、昭和21年から38年までの日本大学教授としての業績、そして各省の多くの審議会の会長や、委員としての功績は、いずれもまことにすばらしいものである。これらは会員各位のよく知っておられるとおりでであるから、ここでは学問的な立場から先生のお仕事の概要を述べておこう。

第一にとり上げなければならないのは、港湾工学、特に臨海工業地帯の研究である。重化学工業の原料を国内に求めることができないわが国では、原料を受入れる港と生産の場である工場とが、直結していなければならない。先生ははやくから率先して、こうした臨海工業地帯の重要性をとらえてその推進者となり、埋立港湾や掘込港湾というわが国独自の修築方式を展開して港湾計画のあり方を方向づけ、今日の飛躍的な経済発展の基盤をつくってこられたのである。しかし、問題は建設技術とコストとのかねあい、それに投資が地域社会、ひいては国民全体にどのようなプラスをもたらすかということであ

った。先生はこの問題に産業連関分析など計量経済学的手法を導入して、投資効果の具体的把握を可能ならしめ、臨海工業地帯の地域選定と規模決定に対する方法論を明らかにされたのである。こうした意味において、先生が土木学会誌に発表された論文「土木計画における産業連関分析と Linear Programming の適用」「土木計画の効果算定式の簡易化について——全国および地域的計画の全波及効果」などは、高く評価されるべきものであろう。岡山県水島、茨城県鹿島、北海道苫小牧など多くの大工業臨海地帯の造成は、先生の研究と指導に負うところがきわめて多いのである。こうして港湾投資計画を中心とする先生の土木計画は、昭和37年に決定した全国総合開発計画の策定に大きい役割を果たし、さらに昭和60年を目標として近く決定されようとしている新全国総合開発計画においても、貴重な科学的背景を提示しているようである。国土と地域の発展に対する貢献は、まことに大きいといわねばならない。

一昨年、土木学会で発足した土木計画学研究委員会では、先生を委員長として、土木技術の新側面としての人間・社会的な面から価値観を導入し、目的論的ないしは計画システム論的な論理体系に関する研究をとおして、新しい土木工学の体系化につとめている。先生を中心として開拓された土木計画学がさらに展開して、人類への奉仕としての土木工学ないしは土木技術が立派な実を結ぶことを心から期待している。

以上は学問的な立場から先生の業績の一端を述べただけであって、広く土木界、さらに社会全般にわたる先生の貢献はまことに顕著なものがある。今回の文化勲章受賞を心からよろこぶものであるが、先生は高齢にもかかわらず、いよいよご健康のようである。文学、芸術、その他多方面にご造詣がふかく、立派なお子様、お孫様に恵まれ、ご幸福な日常のように承っている。人格きわめて円満、人に愛され尊敬される先生である。本年すでにゴルフの優勝カップや盾を7つもとられたとのこと、いよいよゴルフの腕をみがかれて、いつまでも健康であっていただき、土木界のよき指導者として、われわれを導かれることを祈って、今回の受賞のおよこびの言葉としたいと思う。